

## *Harry Potter*と対抗する人々

— 黒魔術か善人か —

岡 田 理 香

### *Harry Potter and the against people*

— Black magic or good person? —

OKADA Rika

#### はじめに

*Harry Potter* シリーズの最終巻である第七巻 *Harry Potter and the Deathly Hallows* が発売された2007年7月、欧米では発売開始を待って多くの人々が開店前から書店の前に行列をつくっていた。中にはHarry さながら魔法使いの格好をした子供たちや大人までが列に並んでいた。*Harry Potter* は第一巻が1997年に発売されて後、最初の数ヶ月で約15万部の売り上げを記録し、映画化されてからさらに人気は拍車をかけた。2000年には世界各国で翻訳され、200以上もの言語で出版された。近年これ以上に熱狂的に読まれた作品はないと言われ、関連商品も次々と出されては飛ぶように売れている。<sup>1</sup>

*Harry Potter* がそれほど人気を得て有名になった理由は何であろうか。その理由の一つは、ストーリーそのものが豊かであることが挙げられる。魔法使いになるための学校生活を通して、日常生活ではあり得ない様々な要素を含み、驚きの連続で、さらにはユーモアさえ含まれている。話の展開には、ファンタジーに加えて探偵物の要素をも含み、さらに読み進めたい気持ちにさせるものがある。また、作者J. K. Rowlingの生涯も読者の心に訴える物があるのだろう。シングル・マザーで生活保護を受けながら、赤ん坊と共にエジンバラのカフェで暖を取り、執筆したという逸話が報道されたが、それに心動かされる人も多い。

<sup>1</sup> Plyming, Philip. *Harry Potter and the Meaning of Life*. Cambridge: Grove Books Limited, 2001, p.3.  
ビュルヴェニヒ、パウル、『小説「ハリー・ポッター」探求』谷口伊兵衛訳、而立書房、2004年、7頁。

Harryに、またRowlingに感情移入した人々は本を手に取り、夢中になって読み、今では多くの親たちが、寝る前に子供に読み聞かせる本の一つとして*Harry Potter*を挙げている。

しかしこの人気の中、アメリカのキリスト教会や団体は*Harry Potter*を「魔術を用いる悪魔の作品」と強烈に非難した。*Harry Potter*の本を屋外に積み上げて火をつけて焼き、学校や教会で*Harry Potter*を読むことや引用を用いることも禁じた。ドイツでも、*Harry Potter*は善と悪の見分けがつかなくなるほど巧妙に混ぜ合わされていると、*Harry Potter*のオカルト性を強調して痛烈に批判しているがいた。またイギリスでは*Harry Potter*の物語が他の古典の模倣である点を指摘し、*Harry Potter*そのものは古典には成り得ない作品だと言う人も多い。

だが*Harry Potter*は探偵物としても冒険物としても、物語としては豊かなアイデアを含む作品で、これは作者の多読から得た知識と、創造力が豊かであることに起因するといえるのではないか。社会現象とまでいわれる*Harry Potter*は現代文化の代表作品と言って良いだろう。現代の人々のニーズに合ったからこそ、このようなヒットを生み出したのである。我々は作品を闇雲に非難するに留まらず、我々の人生で豊かに用いる方法を探っていくべきではないだろうか。

本稿では*Harry Potter*を非難する側の態度とそれへの反論、読者のあるべき姿勢について探っていきたい。

## アメリカのキリスト教会での *Harry Potter* — Against the Potter-world

論者の知る某アメリカ人は、子供たちに絶対*Harry Potter*を与えないと主張する。彼女は*Harry Potter and the Philosopher's Stone*の一章を読み、これは悪魔の作品だと分かったと言う。学校でどれだけ流行しても彼女の家ではその本を買うことも借りることも、読むことそのものを禁じた。子供たちもその母親の言うことに従った。*Harry Potter*に対する非難はこの家庭だけで起きたことではない。ベストセラーのリストに載りながら、同時にアメリカ図書館協会(ALA)の「問題本・受け入れ禁止本リスト」でも上位にランクされている。

*Harry Potter*が発売されメディアが取り上げるようになってから、多くのキリスト教会で、特にアメリカのキリスト教徒たちがこの本を厳しく非難し、学校や授業で取り上げることを一切禁じてきた。

ミシガン州ジーランド学区の教育長は公立学校で*Harry Potter*本を禁止する通達を出した。またペンシルベニア州のキリスト教会やニューメキシコ州の教会もこの著作について「若者達に魔女や魔術師についてもっと勉強するよう奨励している。これらの書籍は多くの若者の人生を破壊する」と主張し*Harry Potter*や関連するCDなどの商品を破棄するために焚書を行なった。フロリダ州の人々は、反対する独自のビデオまで制作した。さらに映画撮影中のイギリスのグロスター大聖堂では、撮影に講義して何人ものキリスト教徒たちが外

でデモ活動を行なった。<sup>2</sup>

また、日本でも作品に異議を唱える活動が見られる。カナン出版はキリスト教伝道用トラクトにおいて、*Harry Potter* 作品の危険性を指摘している。作品の中では魔術や魔法などオカルト的なものが肯定され、「善と悪は見分けがつかなくなるほど巧妙に混ぜ合わされ、すべての価値が破壊されてしまった<sup>3</sup>」と警告している。カナン出版のトラクトは、悪魔的思想から脱出するためにキリストへ希望を置くことを提示し、オカルトからの離脱とイエス・キリストの救いを説くことによって文章を結んでいる。

彼らが *Harry Potter* に対して厳しい扱いをする第一の理由は、話の中で魔法を用いているからであると言う。一部のキリスト教徒たちが作品を批判した一番の原因は、子供たちがオカルトの影響を受けてしまうのではないかとの懸念から生じたものといっていよう。彼らは、この作品が魔法と魔術に満たされていると強く非難し、聖書の詩篇 1 篇やガラテヤ人への手紙 5:19-21 を引き合いに出し、魔術を用いる者は神の国に入ることができないと主張する。

確かに *Harry Potter* の中では魔女の登場があり、魔術を用いる上、暗い場面や戦争の場面もある。親たちが、自分の子供たちを心配して、オカルト的な影響を受けるのではないかと懸念するのも理解できる。だが読んではいけないと全く禁じてしまうことが果たして良い方法なのだろうか。

そもそも古代で「魔女」とされてきた人々が存在したのは、薬草の知識などに長けており、病気やけがの民間治療をした人々を指していた。「魔法使い」である ‘Wizard’ という言葉は ‘wys’ という言葉に由来を持ち、‘wise’ を意味した。‘Wisdom’ そのものは聖書的にも伝統的にも美徳の中心とされている。聖書の箴言でも伝道者の書でも賢者の言葉は教訓として受け入れられ、助言として心に刻まれ、自制心、正直、勤勉といった状態に保つものとされている。Ralph C. Wood によると、魔法と予言は古代世界では一般的な慣わしであり、聖書にも両者が書かれているとしている。聖書は呪術や占いなどを避けるべきであると明確に述べながら（申命記 18 章 9-12 節）、旧約聖書においてサウル王は、死んだ預言者サムエルからの助言を受けるために、エン・ドルの霊媒を使っている。（1サムエル記 28 章）また新約聖書でも魔術師シモンが神を信じる者として登場している。（使徒の働き 8 章）<sup>4</sup>

作者 Rowling 自身は、自らの作品が非難されている事実を冷静に受け止め、魔術を描こうとしたり、オカルト的な魅力で読者を引き付けようとしたりするために作品を書いたのではないと一蹴する。一部の人々は、この作品を通して子供たちがオカルトの影響を受けると

<sup>2</sup> “‘Satanic’ Harry Potter books burnt.” BBC News 31 Dec. 2001  
<<http://news.bbc.co.uk/2/hi/entertainment/1735623.stm>>

<sup>3</sup> 「メルヘンとファンタジーをも超える現実の恐ろしさ — ハリー・ポッターとは? —」カナン出版、2007年。

<sup>4</sup> Wood, Ralph C. *The Gospel According to Tolkien: Visions of the Kingdom in Middle-earth*. London: Westminster John Knox Press, 2003.

心配しているが、作者は、「この作品が実話でないことは子供でも分かるし、作品によってオカルトに入り込むなんていうことはあり得ない」としている。むしろ彼女自身は魔法の存在を信じず、ただ本を書く一つの方法として盛り込んだだけであると述べている。さらに彼女は *Harry Potter* 作品を書く際、様々なアイデアをもとにしながらも特に *The Lord of the Rings* や *The Chronicles of Narnia* の影響が大きかったことを認めている。<sup>5</sup>

*The Lord of the Rings* や *The Chronicles of Narnia* でも魔術は使われている。*Harry Potter* を読む人々の中には、*Harry Potter* 作品と上記の *The Lord of the Rings* や *The Chronicles of Narnia* を同一レベルに置いて見る人もいる。彼らは「*Harry Potter* を読む人はそれが現実の世界とは異なるものであるとはっきりと認識できるはずであるし、その点においては J. R. R. Tolkien や C. S. Lewis と変わらない種類の物語である<sup>6</sup>」と述べる。つまり魔術を用いることそのものは、キリスト教作家の作品でも用いられているのであって、それが作品を非難し読むことを禁ずる理由にはならないといえるのではないか。

*Harry Potter* を非難する人たちの第二の理由は、恐ろしい場面を含むからである。*Harry Potter* には暴力と暗闇の場面が多いため、子供たちを怖がらせてしまうと捉えられているのである。ニューメキシコの The Christ Community Church 牧師 Jack Brock は、この作品を神への冒涇として焚書処分にした一人で、「青少年に魔術的な思考を植え付ける」と批判している。さらに Harry 自身のことを、「人を殺したり傷つけたりしているので悪魔である」と述べ、誰もが神への信仰を妨げる一切の物を捨てるべきであると主張し、本を読まないよう主張している。<sup>7</sup>

だが、もし *Harry Potter* 作品が子供たちに不向きな作品とするなら、他の児童文学作品をも排除することになってしまう。前述の *The Lord of the Rings* も *The Chronicles of Narnia* も恐ろしい場面はあるが、それが子供には不向きとは判断されていない。むしろ作品や映画の意味を考えて見出すためにも鑑賞する価値はあるものと思われる。*The Lord of the Rings* や *The Chronicles of Narnia* といった他の作品が受け入れられている以上、*Harry Potter* 作品そのものは、一部の人々が心配しているような、子供たちの魂をむしろむしばむようなものではないはずである。

*Harry Potter* のお陰で本の売り上げや関連商品販売などの相乗効果だけでなく、実際に良い効果も読者に生まれてきている。活字を読まない子供たちが本を読むようになったことが第一に挙げられる。本を読まずにテレビとゲーム三昧だった子供たちが、書店に並んで本を買い、次々と読み続ける。中には最初の数ページを暗記した子供さえいる。また本に励まされ慰められたという人物もいる。ある少女は *Harry Potter* の不幸な背景に自分の境遇を

<sup>5</sup> Shapiro, Marc. *J. K. Rowling: The Wizard Behind Harry Potter*. London: John Black, 2001, p.28.

<sup>6</sup> 2015年6月1日、論者が日本在住アメリカ人宣教師へ行ったインタビューの内容による。

<sup>7</sup> “‘Satanic’ Harry Potter books burnt.” BBC News 31 Dec. 2001

<<http://news.bbc.co.uk/2/hi/entertainment/1735623.stm>>

照らし合わせて励みを得て、*Harry Potter* をイギリス児童文学の中で最高傑作だと誉める。さらに英語を第一言語としない人たちの間でも、原作をいち早く読もうと、英語で原書を読み始め、それが彼らの英語力の向上にも繋がるという効果もある。

批判的なキリスト教徒たちの中には *Harry Potter* は人気があるからという理由で、逆に敬遠して手を出さずに、読まないまま軽蔑したり無視したりする人がいるのも事実である。しかし今や *Harry Potter* の人気は誰の目にも明らかであり、大切なのはそれを味わって考え、その中に意味を見出していくことである。

## *The Lord of the Rings* と *The Chronicles of Narnia*

*Harry Potter* は他の作品を模倣している点が多い。既述の通り作者 Rowling 自身は、*Harry Potter* を書く際に *The Lord of the Rings* の影響が大きいことと、その作者 J. R. R. Tolkien のアイデアを用いていることを認めていた。また Rowling は愛読書として C. S. Lewis の *The Chronicles of Narnia* を挙げていた。

Tolkien はカトリック信者であり Lewis はプロテスタントの信者であった。そのため二人の作品を研究する場合には、作品のキリスト教的な意味や思想を探求することがよく為され、論じられることが多い。これらキリスト教作者の描いた *The Lord of the Rings* と *The Chronicles of Narnia* の影響下に *Harry Potter* が置かれるなら、キリスト教会側は *Harry Potter* を非難するだけでなく、良い点をも見出せるのではないだろうか。

*The Lord of the Rings* と *The Chronicles of Narnia* の両方においても *Harry Potter* と同様に魔法使いは登場し魔術が用いられるが、「読むべきでない」などと禁じる声は聞かれない。これは作者らがクリスチャンであると知られ、キリスト教的な意味を作品に見出せると考えられていることも理由の一つである。この両作品は読むにも与えるにも良き作品とされ古典となっている。20 世紀で最も優れた作品と評価され、イギリスの書店ではこれらの作品の特設コーナーを随時設け、親たちは寝る前に子供に読み聞かせする本としても人気が高い。

*The Lord of the Rings* や *The Chronicles of Narnia* でも魔法が使われるだけでなく、暗く恐ろしい場面もあり、人々が死ぬ戦いの場面すら多い。*The Lord of the Rings* では主要人物となっているのは魔法使い Gandalf であり、恐ろしい生き物たちも登場し、子供たちが怖がるような場面も少なくない。*Harry Potter* に反論するキリスト者たちは、これらの二作品にどういったキリスト教的な意味を見出すことができると考えているのだろうか。しばらくこの二作品に目を向けてみよう。

まず *The Lord of the Rings* である。これについては、善と悪の戦いが主なテーマとなっている。悪の側とされるのは、Sauron を主としてそれに仕える Saruman やその手下の Orc、また Balrog や Troll、Spider といった恐ろしい生き物も登場する。それに対し、善とされる側は魔法使いの Gandalf をはじめ、Frodo、Samwise といった Hobbit たちや人間

Aragorn などが登場する。彼らは Sauron の指輪を葬り去る使命を負って旅を続け、悪の側との戦いに直面する。残酷で暗い場面もちろん幾度も見られる。悪との戦いは実戦的なものに留まらず、心の中に徐々に入り込み、精神を蝕んでいく形をも取る。(Frodo が指輪を捨てる時になって我が物にしようとしたのは、その現われである。)

善とされる側は最終的に勝利するのだが、その過程で登場人物それぞれが聖書的な役割を果たす姿も見る事ができる。

Gandalf は一度死に、Gandalf the Grey から Gandalf the White へと変わった。その経緯から、一度死んで甦ったキリストの生涯との類似点を見ることが可能である。また Gandalf 側に付く人々にもキリストに似た美德を備えおり、Aragorn は王そして癒し主としてのキリスト的な性質を持っている。主人公の Frodo は指輪を捨てるという重荷を背負っているために、十字架というこの世の重荷を背負ったキリストと同じ役割を担っている。Samwise は Frodo を助ける者として、キリストを助けたシモンと同じ役割を果たすと見ることもできる。

Figure in the Bible	Characters in LOTR	Reason
Christ	Gandalf	Resurrection, his words
Christ	Aragorn	Leader, King, Healer
Christ	Frodo	Carry the burden
Simon	Samwise	Help to carry the burden

このように、*The Lord of the Rings* では、作者 Tolkien がキリスト教信仰を持っていることから、その信仰が土台となり、作品に表われ出たということが、いくつかの聖書との類似点から確認することができる。これについての詳細は論者の 'Theology in *The Lord of the Rings*' (工学院大学共通過程研究論叢 46-1 号、2008 年) を参照されたい。

一方、*The Chronicles of Narnia* においても、キリスト教意味を見出すことは頻繁に論じられる。

物語の中心である Aslan は、神自身の性質を持つ者と見ることが出来る。キリスト教の神は Godhead と言われる神そのものの性質を中心とし、神は唯一の神でありながら、God と Christ と Holy Spirit の三つの性質を兼ね備えた三位一体の神であるとされる。Aslan はその三位一体の神である三つの神性を持っている。第一に Aslan の持つ God の性質は Creator である。聖書の創世記において神がこの世界を創造した記述と類似し、*The Magician's Nephew* においては Aslan が Narnia を創造する。それは創世記の内容だけに留まらず、歌声を用いた記述で、ヨブ記 38 章 7 節に見られる「星たちが賛美する」表現をも含まれた描写となっている。第二の Aslan の性質は Christ である。キリスト教においては、キリストが人類の罪の身代わりとなって死に至り甦った、そして甦ったことで死に打ち勝つ

者とされたという思想を持つ。*The Lion, The Witch, and The Wardrobe* で Aslan は Edmund の罪の身代わりになって死に、甦る。そのために贖いを成したキリストと同じ役割を果たしているとされる。第三に Aslan は聖霊としての性質をも持っている。聖霊は神と同じ神性を持ち、人々を導き、具体的に教え、正しい方向へと案内する役割を持つ。*The Horse and His Boy* で Aslan は猫や凶暴なライオンなど、姿を変えながら Shasta の旅に同行し、正しい方へと導く。さらに聖霊の特質とされる息や香りを Aslan が使うことで、より聖霊らしい性質を現わしている。Aslan は God、Christ、Holy Spirit の神性を備えたキリスト教三位一体の Godhead を示す存在なのである。

Godhead	Aslan's Role	<i>The Chronicles of Narnia</i>
God	Creator	<i>The Magician's Nephew</i>
Christ	Saviour	<i>The Lion, The Witch, and The Wardrobe</i>
Holy Spirit	Guide	<i>The Horse and His Boy</i>

このように *The Chronicles of Narnia* にも、明確な形で聖書の話をもとにして描かれた世界を見ることができる。これについても詳細は論者の「『ナルニア国物語』に隠された思想」(工学院大学共通過程研究論叢 45-1 号、2007 年)、「*The Horse and His Boy* における聖霊の働き」(工学院大学共通過程研究論叢 50-1 号、2012 年)、「*The Magician's Nephew* にみられる天地創造」(工学院大学共通過程研究論叢 51-1 号、2013 年)を参照されたい。

*The Lord of the Rings* と *The Chronicles of Narnia* は、*Harry Potter* が非難を受ける「魔術」「魔法使い」「暗く恐ろしい場面」を描きながらも、キリスト教的な作品として読むことができる作品なのである。

Rowling はこの二作品の影響を多大に受けたと言いき、作品のアイデアやヒントを得たと述べている。Rowling がキリスト者ではないにしても、彼女は創造主としての神の存在を認めており、この世の詳細に至るまで創造したと信じている。<sup>8</sup>

さらに *The Lord of the Rings* と *The Chronicles of Narnia* で取り上げられるキリスト教的な要素、「自己犠牲の愛」や「死からの甦り」は、*Harry Potter* の一卷から七巻を通して見ることができる。Rowling 自身が述べているように、*The Lord of the Rings* と *The Chronicles of Narnia* の二作品が *Harry Potter* の中に息づいているのならば、*Harry Potter* 作品を読むことを禁じるような人たちの目を開くような美徳は *Harry Potter* にも見出せるかもしれない。以下でそれについて見ていこう。

<sup>8</sup> Shapiro, Marc. *J. K. Rowling: The Wizard Behind Harry Potter*. London: John Black, 2001, p.54.  
マウサー、デイヴィッド、B『マグルのためのハリリー・ポッター魔法百科』和爾桃子訳、早川書房、2002年

## Harry Potter の美德 — Virtue of Harry Potter

絶大な人気を誇り、社会現象とまでなった *Harry Potter*、その一方では悪魔の作品と言われ、読むことさえも禁じられてきた。*Harry Potter* を禁じる理由が、魔法を用いている、暗い場面や暴力的な場面がある一方で、キリスト教徒たちが支持する *The Lord of the Rings* や *The Chronicles of Narnia* にもそのような場面があることを見てきた。*Harry Potter* にも読む価値があるとされるような部分が見出せるとしたら、それはこの作品の美德と考えて良いだろう。その *Harry Potter* の美德を挙げるとすればどういうものが考えられるだろうか。

第一に「教育」が挙げられる。Rowling は教員の経験があるため、彼女の教育現場での経験が作品にも生かされているのではないかと。学園物でもあるこの作品は、授業やレポートに試験など、勉強をしている場面も多く出てくる。またスポーツも取り入れられ、登場人物たちは勉強とスポーツの両立をしながら学校生活を送る。登場人物の子供たちはこのような日常を通して知恵や知識を増し加えられ、人間関係を学び、訓練された大人へと成長していく。Harry が周囲から不当な扱いや罰を受けても、黙って耐える姿は誰もが心動かされ、主人公にエールを送る気持ちになるだろう。学校の外においても Harry は親戚の家でいじめられているが自ら復讐することなく、かえって危機の時に救いの手を差し伸べている。日々の中で規則やモラルを学び、勇気や友情を培っていく姿は、作者の教員としての経験に基づいて描かれた教育の現場の一つの形といえる。読者は誰もが経験してきた学校生活や子供時代と比較したり思い出したりし、Harry と同調し、同じ感情を持って寄り添い、物語や登場人物へ感情移入していくことができる。

第二に「愛」というテーマが挙げられる。*Harry Potter* の中では何人かの人たちが自らを犠牲にする愛の姿が描かれている。最も印象深いものは、Harry を救うために両親が自らを犠牲にして Voldemort の前に立ちはだかったことであろう。その愛は両親が実際に命を落とした時だけでなく、Harry が魔法学校に入ってから幾度となく Harry を救ってくれている。*Harry Potter and the Philosopher's Stone* のクライマックスでは Harry が Voldemort と戦いながらも生きながらえたのは、Harry の母の愛のお陰であると Dumbledore は述べる。

Your mother died to save you. If there is one thing Voldemort cannot understand, it is love. He didn't realize that love as powerful as your mother's for you leaves its own mark. [...] to have been loved deeply, even though the person who loved us is gone, will give us some protection forever. (*Harry Potter and the Philosopher's Stone* 216.)

Harry の両親は *Harry Potter and the Order of the Phoenix* の最後でも、Harry と Voldemort との戦いの際に Harry を助けて命を救う。過去にすでに成した自己犠牲の愛が将来いつまでも続

くという考え方は *Harry Potter* の中心テーマの一つでもある。

Dumbledore の性質においても、彼の死に方においてその愛が示されている。魔法学校の中では、魔法使いの家庭出身の者と、そうではなく普通の人間から出生した魔法使いとが登場する。Draco など Voldemort に付く者たちの間で後者は「穢れた血」と言われて差別される。だが Dumbledore はその表現を嫌い、どんな生まれの人をも受け入れる姿勢を貫いている。さらに、他の人には理解されない人々、例えば囚人扱いを受けた Sirius や規則を破ることの多い Hagrid、一度は Voldemort 側に付いていた Snape といった人たちを受け入れる態度にも Dumbledore の愛情が表されている。これは新約聖書の中でキリストが、周囲には理解されない人たち、税人や遊女たちの友となり食事を共にした姿（マタイの福音書 9 章、ルカの福音書 5 章）にも類似している。Dumbledore も Harry の両親と同様に自らを犠牲にする。Voldemort の霊が分断されて存在する Horcrux を入手するために自分を犠牲にし、*Harry Potter and the Half-blood Prince* で死んでいくが、その姿にも Harry や周囲の人たちを最後まで守ろうとする愛、対抗する Voldemort を亡き者にする意志が示されている。特に Harry は大人になってから自分に生まれた息子に Dumbledore と Snape からの名前を取って名付けている。二人の愛が Harry に授かった新しい命へと受け継がれていたのである。これは自己犠牲の愛が死んだ時だけでなく未来にも影響を与え続けるという型を表しているのである。

第三に「善と悪との戦い」が挙げられる。*Harry Potter* の各巻での中心となるのは Harry たちと Voldemort たちとの戦いである。Voldemort や Death Eater が悪の側であるのに対し、それに対抗して戦う Harry たちは善の側と見なされる。Voldemort が自分の欲望のために人々を殺していくのに対し、Harry たちはそれを食い止め、仲間を守り助けようとする。「善と悪との戦い」に関連していることが、戦いによる死、そして死から甦るという「復活」もまた重要なテーマとして加えられる。*Harry Potter and the Deathly Hallows* において Harry は一度死んでしまう。一方 *The Lord of the Rings* においても Gandalf が命を落とし、*The Chronicles of Narnia* においても Aslan が身代わりとなって死を遂げるが、両方とも死んで甦るという復活を果たしている。両者は新約聖書の福音書の最後において、キリストが一度死んで甦り、復活した姿を見せていることの雛形である。それと同様に Harry も死後に甦り、復活する。その Harry の復活にも、Gandalf の甦りや Aslan の死後の復活と通じるものがある。それは Harry の復活の際にも、‘Resurrection’ というキリストの復活を示すものと同じ語が用いられている。また、Tolkien と Lewis の持つ信仰から、キリストの死の復活の記述が Rowling の頭にもアイデアとして入っていたといえるかもしれない。Harry の生命は死後の復活に留まらず、Ginny との間に授かった息子へと、新しい命へつながっていく。

このように *Harry Potter* には、「教育」、「愛」、「善と悪との戦い」といったテーマをもち、それはキリスト教作品 *The Lord of the Rings* と *The Chronicles of Narnia* にも見られ

る共通するテーマである。

Rowling は自らの読書の題材や教員としての経験をもとに *Harry Potter* を書いてきた。*Harry Potter* は探偵物、学園物としてストーリー性が豊かで、読者が感情移入してしまう要素がある上、これらの「教育」、「愛」、「善と悪との戦い」といったテーマを見ることができ、Tolkien と Lewis の影響も加わり、より奥深い作品になっているといえよう。広義に解釈すればキリスト教的な要素をも含んでおり、一部のキリスト教会が反対するような、本を禁じる理由にはこのように反論する余地がある。かえって *Harry Potter* 作品は大勢の人々に読まれるべき作品であるといえよう。

## おわりに

*Harry Potter* は一部の人々から反対を受ける一方、世界中で多くの人々に受け入れられ、愛されてきている。Nestle Smarties Book Prize に続き、The Federation of Children's Books Group Award、The British Book Awards Children's Book of the Year 等を次々に受賞している。*Harry Potter* と出会うまでは全く本を読まなかった子供たちが夢中になって活字を追うようになり、物語の内容について意見を述べ合い、議論する。ストーリーは創造力に富み、学園物、探偵物の要素を含みながら、スポーツや生徒たちのライバル意識、一風変わった教師たちなど、斬新で革新的なファンタジーとなっている。

確かに *Harry Potter* は批判されることが多い作品だが、現代の社会現象の一つとして取り上げることで、人々と情報を共有する手助けになる。今の時代に人々がどういう物に興味を持ち、何が流行し、現代の人々は何を求めて生きているのか、そういった事柄を知ることが重要である。それをもとに人々を理解し、求めているものを知り、それに対して自らはどう反応していくかを示すことができるのである。

神学者 Francis Bridger は *Harry Potter* の著者がキリスト教界から厳しく非難されているのを見て、その非難には同意できないと述べている。作者 Rowling は神学者でもなければキリスト教作家でもない。ただ読者は神学的な視点で作品を読んでキリスト教的な意味を見出すことはできる、と Bridger は述べている。<sup>9</sup>

もし我々がオカルトだと批判したり、闇雲に嫌うことをしたりせずに、適切な方法で *Harry Potter* を用いるなら、何か肯定的な意味をも見出すことができるはずである。*Harry Potter* の投げかけるテーマや問いかけに対し、*The Lord of the Rings* や *The Chronicles of Narnia* に描かれた愛や復活について述べることも可能だろう。さらには *Harry Potter* を例として使うことで、この作品で描かれているテーマに対し、善や美徳とはどういうものかを

<sup>9</sup> Bridger, Francis. *A Charmed Life; the Spirituality of Potterworld*. London: Darton, Longman and Todd, 2001, p.106.

伝えることもできるだろう。

我々是人々との会話において、あるいは議論において *Harry Potter* に見られる精神や、生き方や人としてのあり方を論じることができる。我々読者は作品の中に意味を見出すことができればそれで充分である。事実、見てきたように *Harry Potter* には美德とされるようなテーマを見出すこともできるのである。

非難する人たちの中には、本を読まずに意見を述べる人もいるが、原文を読まないまま非難するのは非常に危険な行為である。物事の片側しか見えず、読後に広がる世界を無視したままに論議しているためである。読書そのものは人の人生経験を豊かにし、視野を広げ、自らの世界さえも広げていくことができる。自分自身が登場人物に感情移入し、アイデンティティを感じ、どう生きるべきか、人としてどうあるべきか、その理想すら教えてくれることもある。さらに別の境遇にある人々の立場を理解できるようになり、人間として大きく成長していく手助けともなる。

読者はどんな作品に対しても公平であることが最も重要である。どの作品も使い方によっては、人々の関心を知り、それに反応して自らの意見を発信していくことに有効に用いることができるのである。

*Harry Potter* は人間の暗い面のみならず、「教育」、「愛」、「善と悪との戦い」を示していた。そして忠誠さや勇気、友情、モラルを学ぶなど人間の美德とされている部分も表している。魔法を使うストーリーでありながら、愛や忠義や純潔といったものが、どんな魔法よりも力があること伝えようとしている。さらには死後の甦りという聖書的な要素さえも示している作品である。危険だからという理由で本を読むことを禁じるよりも、本を読んで人々と情報を共有していくことの方が大切であり、作品を読んで考えそれについての意見交換ができるようにしておくことが重要である。作品に対する態度は、読者が読後に決めればよいのであり、作品から得られる良い面に目を向けるなら、読者としてまた人として、広い視野を持ち、あらゆる人と情報や考えを共有していける良き読者になれることであろう。

## 参考文献

- Bridger, Francis. *A Charmed Life; the Spirituality of Potterworld*. London: Darton, Longman and Todd, 2001.
- Colvert, David. *The Magical Worlds of the Lord of the Rings*. London: Penguin, 2002.
- Ford, Paul F. *Companion to Narnia*. San Francisco: Harper San Francisco, 1994.
- Hooper, Walter. *C. S. Lewis: A Companion Guide*. London: HarperCollins, 1996.
- . *Past Watchful Dragons: the Narnian Chronicles of C. S. Lewis*. New York: Collier Books, 1979.
- Lewis, C. S. *The Complete Chronicles of Narnia*. London: HarperCollins, 2000.
- Manlove, C. N. C. *S. Lewis: His Literary Achievement*. New York: Macmillan, 1987.
- Plyming, Philip. *Harry Potter and the Meaning of Life*. Cambridge: Grove Books Limited, 2001.
- Rowling, J. K. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury, 1997.
- . *Harry Potter and the Chamber of the Secrets*. London: Bloomsbury, 1998.
- . *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. London: Bloomsbury, 1999.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury, 2000.
- . *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. London: Bloomsbury, 2003.
- . *Harry Potter and the Half-blood Prince*. London: Bloomsbury, 2005.
- . *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury, 2007.
- Schakel, Peter J. *Reading with The Heart: The Way into Narnia*. Grand Rapids: William B. Eerdmans, 1979.
- Shapiro, Marc. *J. K. Rowling: The Wizard Behind Harry Potter*. London: John Black, 2001.
- Shippey, T. A. *The Road to Middle-earth*. London: Grafton, 1982.
- Sibley, Brian. *The Lord of the Rings: The Making of the Movie Trilogy*. London: HarperCollins, 2002.
- . *The Lord of the Rings: Official Movie Guide*. London: HarperCollins, 2001.
- Tolkien, J. R. R. *The Lord of the Rings*. London: HarperCollins, 1994.
- Wood, Ralph C. *The Gospel According to Tolkien: Visions of the Kingdom in Middle-earth*. London: Westminster John Knox Press, 2003.
- . "Christianity and *The Lord of the Rings*." *The Christis*. 25 Nov. 2005  
<<http://www.christis.org.uk/archive/issue83/lotr.php>>
- . "Citing love of God, Butler County church burns books, tapes, CDs." *PG News* 26 Mar. 2001  
<<http://www.post-gazette.com/regionstate/20010326bookburn2.asp>>
- . "J. K. Rowling's *Harry Potter*: A Christian Parent's Nightmare?" *Facing the Challenge Org*. 11 June. 2015  
<<http://www.facingthechallenge.org/potter2.php>>
- . "'Satanic' *Harry Potter* books burnt." *BBC News* 31 Dec. 2001  
<<http://news.bbc.co.uk/2/hi/entertainment/1735623.stm>>

新改訳聖書刊行会編訳.『新改訳聖書』日本聖書刊行会、1982年。

ビュルヴェニヒ、パウル、『小説「ハリー・ポッター」探求』谷口伊兵衛訳、而立書房、2004年。  
マウサー、ディヴィッド、B『マグルのためのハリー・ポッター魔法百科』和爾桃子訳、早川書房、2002年。

———.「メルヘンとファンタジーをも超える現実の恐ろしさ — ハリー・ポッターとは? —」カナン出版、2007年。

(おくだ りか 非常勤講師)